

意見交換会における主な意見の概要

1 日 時 令和3年7月30日（金） 午後1時30分

2 場 所 議会棟 大会議室

3 参加団体

一般社団法人 京都府木材組合連合会

株式会社いとう

株式会社あしだ

尾崎林産工業株式会社

ホリモク株式会社

株式会社北桑木材センター

株式会社竹内工務店

株式会社リヴ

京都府森林組合連合会

4 主な意見

【森林事業者等】

- 山からなかなか木が出ない。原木価格が低すぎ、森林の再生に持っていけるだけの資金がない。需要が伸びないと木材価格は上がらない。
- 山林の伐採には道が要る。林道の整備には国の補助事業もあるが受益者負担が必要。造林事業の担い手も不足している。
- 外国材に比べ国産材は価格が高い。それは日本は急しゅんな山が多く機械化が難しいため。
- 皆伐した後は、植林して元へ返すことが大事であるが、植林に国や府の補助金を利用してもし山林所有者の自己負担があり賄えない。間伐に頼らざるを得ない。行政の力が必要。

【木材加工事業者等】

- 加工段階での技術革新が立ち後れている。
- 京都に非住宅にも対応できる大型の加工施設が必要である。
- 木造・木質化が増えてきているのは間違いない。仕事量も増えているが、民間会社はお金が儲かる仕組みがないと成立しない。ウッドショック（外国材が入らず、競争原理で国産材価格が高騰すること）は例外として、適正な木材単価を維持する必要がある。材価が上がれば山側にも還元できる。
- 府内の公共建築物への木材利用は最近ないが、（発注の）情報が入ってきたものに的確に供給できるよう分離発注を導入してはどうか。そうすれば府内産木材を確実に供給できる。
- 木材価格は外国材が最も安く、次に国産材、府内産木材が一番高いと思われているが、今は府内産木材が一番安い。それは流通ルートが短いからである。木材の地産地消などを進める施策が必要。

- スギは相当数流通しているが、関西では風習の問題もあり、横架材（梁や桁など）としての利用は少ない。
- スギの強度は木によりまちまちである。材に限らず強度のみを判定基準としてはどうか。
- スギは乾燥が難しい。乾燥技術やスギをどうやって使うのかを、ハイブリッドも含めて公的機関で研究すべき。
- 公共建築物については、府内産木材しか使わないようにする。使わない場合はその理由を示す、などのようなことも考えていただきたい。
- 府内産木材使用量に係る府の目標があるが、目標達成にはかなりの労力、雇用が必要で難しいと思う。林業従事者は賃金が安く、人材が田舎から都会へ流れていく。

【建築・設計事業者等】

- 観光施設や非住宅分野に木材利用を増やすべきである。
- 設計者が大型木造施設に慣れていない。木造設計を担える建築設計者を増やすべきである。
- SDGs の関係もあり、施主からの要望で建築物に環境に負担をかけず、減価償却も早い木造を選択するケースも見られる。環境への配慮は企業の売りになる。
- 福祉施設や幼稚園等の木造施設も普及し、府内産木材も認識され始めている。酒造会社も、「酒→山、水」をストーリーとして木造建築を選択している。木造は足腰への負担が少なく、木の匂いの効果などのメリットがある。
- 公共の建物に府内産木材を積極的に使用することが必要。他の建築物の見本になる。
- 自分の家にどんな材が使われているのか知らない人が多い。京野菜のように府内産木材を使うようPRしていくことが必要。
- 国産材は勝ち組と負け組がはっきりしている。それはニーズを掴み切れていない事業者が置き去りにになっているからである。施主は京都の木のストーリーを欲しがっており、納得が得られれば高い木材でも買われている。木材品質は地元のほうが絶対によい。
- 補助金を出したとしても事業者には響かない。むしろ、地元の木を使う事の価値や、東京や神奈川などのように、森と都市をつなぐ木のストーリーを打ち出すほうが良い。
- 住宅の建て方が変わってきている。木材を見せる使い方から見えなくする使い方に変わっていることがA材（※）の需要が減少している理由である。内装にはスギやヒノキの品質の良いA材（※）を使用してはどうか。例えば幼稚園、保育園では木の良さを園児に伝え、将来、木の家を建ててもらえるよう、ウッドファーストにしてはどうか。

※A材：主に製材用

B材：主に合板用

C材：主に燃料・パルプ用